

以下 汚れあり

以下 虫食い

1/58



延道

荒蕪

食女鷹

八卦唐

廣芝

金砂

外に掛る

御面王鼻鼻鼻

鼻鼻王舞

門守 看督尉

拍犬

神道各目物云

諸社多獅子頭あり其ノ意旨ハ詳モ或獅子頭ハ拍犬ニ同ジ宮社ノ御守ニ故々祭禮拜奉ノ所支ニ是ト祭事ト云ハ拙者ノ御守ノ義ハあハテ祭礼ノついで凡流ノ類ハカシ田樂ノ曲ハ江戸日吉ノ祭ハ獅子頭由田樂ノ曲由是ト云ハ古ノより云々

駒形神

神馬

造馬

繪馬

洗米

御饗

御饗

御饗

御供米

御供米

御供米

永閑庭稻穂

結註糰餅

笛形餅

小忌干早

舞衣

麻服

淨衣明詠

袴衣大紋

指貫

白張黄衣

和鬼黄衣

幸竟奇色

霊社

柞櫃

神衣箱

魚甲

下神人着箱

鳥帽

勸請神

宗廟社稷

勸進

明神

天皇

推現

神位

神階

地土神

雞籠子

御前多儀

産神、産社、彦砂、由之

○本宮本社 攝社末社ニ對シテ

○別宮別社 攝宮攝社あり

末社本宮ニ繼有リ神又縁多ク神

○攝宮攝社 本宮ニ由縁ノ神或

常時ノ社司の意ナリテ祭事多ク

仰別等々ヲ攝宮ト云ノ御鎮座

是ノ其社ハ本社トシテ

傳記云攝神院原宮一庭匠

了早ク本宮ニ對

皇大神宇遷宮ナリ此伊雜宮

相殿神 田意ナリ同殿ノ少

一庭匠 皇大神宇遷宮ナリ此攝社

合座神 一殿ノ數神

仰別等々ヲ攝宮ト云ノ御鎮座

大社小社 宮庭ニ造ル

傳記云攝神院原宮一庭匠

千木ノ大尺ノ定 大社千木一丈八尺 中社千木一丈二尺 小社千木一尺ト云々

桂葉

世ニ能ク流跡

菅江真澄誌

○高清水園カノ事

續紀十卷天平五年十月己未出羽棚遷置秋田村高清水園又於雄勝村建郡居民焉云々見之秋田村云々今秋田郡寺内山其地あり云々秋田村を郡と爲し繪下之水の高影と云記云此事は伊ら云々考のせされ地處小を能くあり

○白磐須波カノ事

三代實錄十八卷不負觀十二年八月廿八日授三河國正五位下智立神砥鹿神並正五位上從五位上狹投神正五位下出羽國白磐石神須波神並從五位下云々見之三河國知立神今池鯉鮒驛カ摩俗狹投前社云々避蛇ノ守札出羽神社砥鹿神ハ本宮山ト云々高山

末社小阿羅行纏社 長良波邊神社より多岐よりゆきてあり 秩投佐佐木直子言
 大鐸の名あり奈神大白雄命日本武尊の兄の御神 真澄者也
 此御神を尊くしめりてこの地を治す也云々隱りかしり給ひたり也都より
 中給ひしき驛路大鈴を山齋て山さのの名山負つらむし推はるる也
 事なり心せしむれりて記ゆて此出羽國の白磐神と云々今の本郡
 常磐御近く米代河の岸方小白岩社あり又仙北郡出羽本郡阿弥陀山阿彌陀山 麓あり
 白石岩あり亦同仙北郡中流川村小白岩と云々枝村ありは須波神也又秋田郡
 阿佐道城の近き小諏方社あり同郡夜又登の蝦夷漢語方社あり河邊郡中北出
 在百崎飛騨村宮中本舊諏方社あり又仙北郡駒形在六郷之須波社あり云々
 至もゆれを自觀の御世宮地と定めありむしりて今も此の神社あり
 むりきりて今も大と云々常磐給神垣あり又村名田島田島の字あり給神號も云々
 云々白磐神須波神並五位下り也此地白磐村須波社あり中流川を言社也

○秋田賊地十二村云々

三代實錄世四卷元慶二年七月十日癸卯出羽國飛驒奏曰云々
 上野國見剽兵六百余屯秋田河南拒賊於河北又秋田城下賊
 地者上津野犬内楯淵野代河北腋本方口大河堤 野刀
 方上焼岡十二村也云々見たり其十二村の上津野陸奥國毛布郡
 今至鹿南鹿角今多鹿角上津野の轉語也火内秋田郡之比内楯打也
 書物にほんと火内は蝦夷語の比内と急語て云々比内は比内なり
 然るも蝦夷任て莫言多殘り蝦子の枝郷今高がし知巨奈草と云々
 柵養野澤あり奈草澤と云々柵前嶋も同名あり也
 阿佐孫古跡あり應永五年の流松淵播磨守某の居城也其地は松淵と
 地名なり○野代と書紀小澤代と見え延寶天和の事也代と云々
 近世不能代と云々郡今の本心○河北は同本郡富岡在雲霧山古城槍古郷

あつた古記録古佛の事ありて河北とありあり。○喉本秋田郡古書紀
 思前近く鹿の雄猪島浦の脇本村あり古涌本温泉あり。脇本の名多し秋田表を
 男麻榊原とて雄猪島浦の脇本村あり古涌本温泉あり。脇本の名多し秋田表を
 脇本五郎其より土崎凌戦を見たり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 湖口あり世に龍湖の邊に湖口ありと云あり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 方口と云あり。○大河に秋田郡の一日市と云あり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 地と云あり。○東鑑に文治六年の條に七月壬戌奥州囚人二藤次忠孝者
 大河次郎兼任弟也頗不背物儀之間為御家人ト云あり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 任たり。○又永慶軍記に大川左衛門といへり。○堤の塘とも書けり。○
 世村秋田郡中津又枝郷に川堤あり又上堤下堤あり村あり又堤五左衛門といへり
 軍書に見たり。堤よりいへり仁の字ありいへり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 誤り婦か布戸をいへり。今男麻榊原に在り。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 分上別上りともいへり。今脇神といへり。米代川の崖上小あり。○焼田郡同郡率浦在り

村に在り。焼山ともいへり。○元慶二年四月廿八日癸巳出羽國守正五位下
 藤原朝臣興世飛驒奏言賊徒野燒不能討平且差六百兵守彼
 隘口野代營。比至焼山と云あり。隘口、鹽口と誤り。わや焼山といへり
 見たり。世事水の面影もいへり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より

字々示古

游奈古の林をいへり。秋田郡五十目山内の圓通寺といへり。禪宗の寺あり。
 世山古柵あり其麓に在り。世事、雪の山踰といへり。日記に云し。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 山内藤倉村に近り。松原の補陀寺に近り。游奈古澤といへり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 内とあり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より。○方口出羽のく湖水をいへり湖より
 寶龜土年八月乙卯出羽國鎮狄將軍安倍朝臣家麻呂等言狄志良
 須停囚。字奈古等歎曰己等據憑宮威久居城下。今世秋田城
 遂永所棄歎ると見えたり。○方口出羽のく湖水をいへり湖より

方口出羽のく湖水をいへり湖より

文をたれ、氷冬、三きぬれ、家小ひ介て、暗れ待つる、襟を氷うらみ、
と、はらひ、ひきりして、見せ、い、石、好、あり、し、り、降、事、を、誠、ある、も、は、
三代實録、甲、六、卷、元慶八年、九月、廿九日、子、星、出、羽、國、司、言、今、年、六、月、
廿六日、秋、田、城、雷、雨、晦、冥、雨、石、鏃、二十、三、枚、七、月、二、日、飽、海、郡、
海、濱、雨、石、似、鏃、其、鋒、皆、向、南、陰、陽、寮、占、云、彼、國、之、憂、應、心、在、
兵、賊、疾、疫、云々、と、也、と、り、い、ち、り、も、石、鏃、の、多、り、事、あり、秋、田、城、も、
い、と、寺、内、の、地、も、今、も、石、弩、の、出、り、自、ら、あり、地、事、大、水、回、影、あり、ひ、つ、り、あり、

○流霞道とて

流霞道、霞、流れの道とて、い、ち、り、も、出、羽、秋、田、路、陸、奥、南、郡、津、輕、人、
其、長、峯、其、長、嶺、事、と、か、た、れ、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、
い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、
三代實録、世、卷、元、慶、二、年、十、月、十、日、云、自、流、霞、道、至、秋、田、營、同、世、五、卷、元、慶、

三年正月三日云々去年九月十五日好蔭来自流霞路、十五日春風来
自上津野、今云南條云々と見え、唐南よりとく近見地也、秋田の營
い、ち、り、も、寺、内、の、山、榎、館、の、跡、を、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、
い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、い、ち、り、も、

○瑜伽寺の事あり

是、湯、香、崎、の、不、動、王、の、縁、起、と、記、す、と、い、ち、り、も、い、ち、り、も、
出、羽、國、秋、田、郡、新、城、庄、新城、其、内、殿、本、湯、香、崎、今、湯、香、崎、村、瀧、阿、遮、羅
明、王、鎮、座、寺、也、瀧、本、山、不、動、院、也、い、ち、り、も、い、ち、り、も、
病、客、群、集、り、入、浴、せ、り、弘、仁、天、長、の、頃、也、圓、仁、大、德、海、覺、大、師、也、
奥、羽、も、事、の、た、り、世、温、泉、浴、給、ひ、く、御、傍、三、寸、斗、の、大、聖、不、動、王、
也、一、刀、三、禮、針、を、さ、り、り、堂、を、嚴、の、上、建、り、ぬ、り、ぬ、り、ぬ、り、ぬ、り、
と、い、ち、り、も、圓、仁、大、師、を、美、和、五、年、戊、午、七、月、二、日、と、記、す、と、い、ち、り、も、

國小いなり其の事其の事... 難事... 舟着... 赤山の
 法華院... 久龍... 事... 雄鹿浦... 赤神...
 赤城神伊賀保神... 赤城明神... 雄鹿浦... 延長天慶の云
 大地動... 温泉... 水浸... 脚氣... 癩瘡...
 御正林も朽... 享保二年八月廿八日... 覺圓仁大師の

作像... 名譽... 腹内... 源正尊... 遷宮... 垂徳... 明王堂...
 源正尊御堂清浄... 文化西年丁丑五月九日不動明王と
 遷宮... 垂徳... 明王堂... 下行... 明王堂... 湯ヶ池... 瑜迦寺...
 三代實録

十三卷清和天皇御世貞觀條貞觀八年九月八日庚戌以出羽國
 伽寺預之定額也見之於此定額と云ふは其の定額と云ふは
 其事を云ふことにはいふべきなり徒然草に諸寺の僧は
 あつた定額に女孺と云ふは延喜式に見えずに女孺といふは
 ある工人の通号に「女孺」と云ふは女官下女孺といふは
 寺の工の定額に「女孺」と云ふは女官下女孺といふは掃除
 油まといふは「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは

いふべきに「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは
 由迦百多れ名やらの旭嶽と云ふは川を旭河と云ふは又淡打や
 膝と云ふは「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは
 多門天も其寺の有り母齋の像ありと云ふは
 一王子跡といふは「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは
 うは「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは
 神の像といふは「女孺」と云ふは海に續日本紀文武天皇天寶元年八
 月皇年滿者不論官不皆入賜祿之額又弘仁文日大
 政官府禁斷京職畿内諸國私作伽藍寺奉釋定額諸寺
 其數有限云々云々十八史略第七元以郎律禁定額諸寺
 定奉賦稅云々出絲一尺以給諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩
 四十斤永定額とあり云々數の定額と云ふは其の定額と云ふは
 裕迦羅制多迦と名を負ふ二本の大杉のありも今打と云ふは
 龍あり世龍三奇あり一夜の更天燈降り二の洪水と云ふは
 妙きく有る三奇を夜に鶏の鳴く時流るるありと云ふは

建長四年
壬子
八十八代
後深草院
成世

秋

十訓抄序 夫世中あましくとよまぶるべきものありしは、
高きもの賜き子とて、日守賢かゝり得多く思ふべし、失多しきは、
若くは物成とて、さうて、建長四年とせのそ神聖月の、
暇のあき心困る、折なきあまう、ゆめを、事ある事なきあまう、
第一可施人恵事

小菴中納言筑紫下給ける道吉、徳嗣のころさんとて、
と買て放ちけし、其後若君の二つそり、
継母のよ心合、取らるゝこれあやまらぬ、
おと入、中納言あまう、
甲、
如夢傳秘の物語とて、人とは、
も又、

五、若中納言和国花とて、
あり、

見れば、権子妻が手つゝ、勢と云行へり
 空しくも向ても、高観房千福、あるを
藤四郎の本、是こそしてあつた、りと云思て、かれを
 きよあつひも、心のり、返事せん、是て云行けり
 出ても、心のり、返事せん、是て云行けり
 千福の藤四郎の、心のり、返事せん、是て云行けり
 勢と云、心のり、返事せん、是て云行けり

○十訓抄九冊 建長四年十月旬頃 菅原為長

○林示秘鈔中下 順徳院御抄
○寛文五年同辰

本云 林示中抄三卷
 正和五年五月十日申出禁裡御本家中書之可紙
 文卯九年四月初條筆五月中旬終寫切了不審仍也
 難加推量寫之、摘以不及料簡之所、有之、以善本可
 令授合而已

○官職知要三冊 兼武 特進通秀
元禄十年九月廿七日 邦宮由良氏抄

○制度通 十八巻 伊藤長胤輯
 左大臣實徳云

○拾芥抄 左大臣實徳云

○總略院義政の御世の人

新撰姓氏錄六卷

萬多親王

塔囊抄七卷十五本

觀勝寺行譽跡抄

異傳日本傳十五卷

松下見林

百寮訓要鈔一卷 二条良基公

足利氏為將軍の石室より入る官職の事

鐸

鐸石別命

鐸石古事記作沼帶鐸訓奴利且顯宗紀同又訓奴見同紀歌在皇紀或訓佐

奈岐今按崇峻紀白膠木此云濃利泥傳名鈔引辨色立成云白膠木沼夫蓋木鐸用此材故同名歟又白塗土鈴見延喜式萬葉集等或据此而名之歟

檢校

神明記訓同和伊和鏡通

富寬

萬葉集云猶豫不定古今集云伊豆我乎人奈尤米曾大船乃由多乃多由多尔物思布比原氏談歌琴乃音介引留良留留手鏡多由多布心君名良末也

非時香草

古事記作登岐士玖能迦玖能木實五雜俎曰今大内進御每非時之物乃為傷名鈔結

果和名加久乃阿和蓋香菓之沫也江次第作加久鐘乃阿及奈

神仙秘區、神代紀、恩賴訓、美多麻夕
賴聖帝、神靈、布衣

日本書紀卷第七通證上、大足彥忍代別天皇、景行

誥、誥、碓、傳名、鈿、碓、和名、加、良、宇、須、桓、譚、新、論、曰、宍、穰、制、

詠宮、持曰之利、

不使、顯宗紀、光恭紀、訓、同、今、俗、毛、與、利、之、言、也、二、字、

巡狩、孟子曰、巡狩者、巡所守也、狩或作守、

夷守、延喜、主計式、筑前國、驛馬、夷守、十五足、乃、彗、集、云、

大嘗、家持等、相送、驛、使、共、到、主、守、驛、使、

神存、神祇令、凡、大嘗者、每、世、一、年、

白膠木、白膠木、沼、天、今、括、鐸、訓、奴、利、豆、又、訓、奴、豆、蓋、漆、手、之、

四天王、法華文句曰、四天王者、帝釋、外、臣、如、武、將、也、長、阿、含、經、曰、

關神、將、護、弗、邊、提、人、不、令、侵、害、南、方、天、王、名、毘、瑠、瑠、此、

云、增、長、領、雄、摩、荼、及、蘇、蘇、神、護、關、浮、提、人、西、方、天、王、名、毘、

留、博、又、此、云、雜、詔、主、領、一、切、諸、龍、及、富、軍、那、將、護、耶、那、人、

四天王寺、又、見、推、古、元、年、紀、此、其、基、瓦、瓦、一、名、三、津、寺、又、名、難、

陀、又、稱、法、華、園、又、名、敬、田、院、平、氏、太、子、傳、曰、於、王、造、彦、

鞆、世、所、謂、鳥、傳、師、者、是、也、黃金三百兩、西、訓、古、呂、持、統、紀、

推、同、於、芥、鈿、六、錄、焉、

新羅明神 在三井寺之北院

祭神 一座 卜部家説為素盞鳥尊 未詳

伊勢 宮 赤波木大明神

白子觀音寺 在白子 寺領

出 安産守札 即尊像圖畫也 信之必有驗 寺内有栲樹 每年四時開花 稱不斷栲 名木

雷電

武甕雷神 高倉三郎 雷電ト云ク

布都主神 佐土布都 豊布都神 産布都神ト云是

川上郡

裸伴

書紀垂仁卷云三十九年十月辛瓊敷 立り亦名 裸伴ト云 石上神宮 舊事紀曰赤花之伴ト云

日本記通證十寒 冷水 古事記仁德記酌淡路

おとひ

おの

おのり

おのり

おのり

おのり

島之寒泉 献大御水也 延喜式御水訓於毛比 倭姬世記御水訓於毛由 小名寄云忍穗井常曰 於茂比 倭名御生水 毛比止里 借馬樂云 飛鳥井不宿波須邊之陰毛 倭美毛寒之御 秣毛 佳茶塵 御曰美毛比水之清少 納言云 美毛比毛寒之止 儀多留古曾可笑介禮 赤保衛門集云 冷可奈 於毛比冲途 而尔 罷

和訓

不^レ子^ハ

倭名劔、辨火と云り、切韻に逆焼なりと云云、又燭又作

字統

防野火也と云云、又、火のけ、消ぎえ反けり、或大退

と云り

童蒙、頌韻に根はもとよみ

不^レ子^ハ

工匠の行を、符も直荀も、田男を、ほをのさるるものと云、田男犯ては、

なり

埃裏抄と云り

不^レ子^ハ 埃裏抄と云り

古事記九之卷

神代七之卷

負^レ千^ノ位^ノ置^レ戸^ノ

科^七十^ノ座^ノ置^レ戸^ノ之^レ解^レ除^ル、^レとあり、^凡を^レ波^レ良^レ比^レ二^ノ其^一、

伊^レ那^レ那^レ岐^レ大^レ神^ノの^レ河^レ津^レ崎^レ原^レに^レ禊^レ祓^ルの^レ如^シ、^一此^レの^レ解^レ除^ルの^レ如^シ

是^レ罪^レ犯^ルの^レ科^セ物^ト、^後具^レ書^レ紀^レ見^ルを^レ出^レ贖^ルは

なり、^凡れ^レ其^レ事^も意^二別^レなり、^一但^レれ^レ本^二なり

書^レ紀^ノ履^中卷^ノ車^指君^ノ罪^有て^レ員^志解^除善^解除[、]而^出

於^レ長^湍崎[、]念^禊祓[、]や^あ、^凡れ^レ見^ルに^レ把^レり[、]あ^らは^レる^に

水^邊に^あり[、]禊^祓け^り、^是罪^犯も^穢も^回下^けせ^らる^に

罪^犯を^解除[、]穢^汚を^清じ[、]禊^祓を^全回^し

同^ハ註[、]彼^一方^ノ柱^を、^川中^子只^一立^て持^せて[、]多^海を^持

希^見しく^構あり[、]さ^れば[、]是^一膳^子名^をも^員志^持

と^し柱^を足^で歩^き、^後世^も四^足門^をあ^らは^レる^に

延^在本^ノ小^漢釋[、]一^柱觀^のこ^とを^引き[、]仰^ぎめ^らる^に

傳西

海_ト葦_ト

○燧_ト印_ト

肥_ト伎_ト理_ト字_ト須_ト

燧_ト杵_ト

肥_ト伎_ト理_ト

政_ト泥_トと_ト刻_ト法_ト

國_ト抄_ト

命婦神ハナハチハナハチ名考山_ト城_ト國_ト稻荷_トの_ト神_ト人_ト狐_トハ命婦_トト云

地震神ナナフシハナハチ日本紀推古卷云七年夏四月乙未朔辛酉地震ナナフシ動ナナフシて

十二所加持 身體の上_ト十二所_ト加持_トする_トあり是_ト十二所_ト加持_トト云

遷宮ナカニ正遷宮ナカニ假遷宮ナカニ社頭造營あり_ト權殿ナカニより本殿ナカニ遷_トる_トあり正遷宮ナカニ云

又本殿より權殿へ遷座あり假遷宮亦假遷宮ト云又外遷宮ト云

氏人職ウヂノトハ_ト禰_トハ_ト神_ト官_ト也
子良子 伊勢神宮ハ伊勢女官_トハ_ト神樂_ト又御饌調進_トの事_トあり
或子良子ハ_ト細_ト命_トより始_トると云

學生マカハラ

天武記訓同蓋文屋童也母有文屋亦此義

俗人シヨキ

訓爲白衣謂非僧也

道人オコナフ

智度論曰得道者名爲道人出家者未得道者亦名道人

盛衰記ハ伊勢國の住人江三郎氏盛とある一度會郡江村爲後ハ伊勢三郎ト稱す

日本紀ハ朴訓ナリ今櫻トあり和名抄云る也亦佐楨ト云

夜_トの_トく_トめ_トく_トり_ト或_ト櫻_ト樹_トト_ト云_トハ_ト四_ト拍_ト云_トト_ト云_トハ_ト日本_ト紀_トハ

神納村の神ト云_トハ_ト伊勢_ト出_ト張_ト神_トト云

ひ_トと_ト松_ト林_ト紙_トト_ト云_トハ_ト山_ト家_ト集_トト_ト云_トハ_ト彌_ト字_トハ_ト篇_ト集_トト_ト云_トハ_ト比_ト身_ト也_ト

ら_トり_トの_ト山_トト_ト云_トハ_ト弱_トキ_トト_ト云_トハ_ト二_ト合_トの_ト意_トト_ト云_トハ_ト頭_ト上_ト真_ト紅_トト_ト云_トハ_トめ_トの_トひ_トと_ト云_トハ_ト青_ト黄_ト也_ト

雖奉其精也イハル

右のあまのふかりけりなめりしひらけりしみけり。

めりしひらけりしイハル肖間云目持多かりし事也

法子と感涙也イハル佰氏明石の入るがかりし事也

後我恩寺の思見抄イハルの事也

お勢の詞去く一向イハルの事也

向ふイハルの事也

肖間云三ヶ夜七ヶ夜イハルの事也

實陰云昔七夜イハルの事也

七夜イハルの事也

是意イハルの事也

古事記傳卷四イハル勝佐備師説イハル追ひイハル云又イハル約イハル

佐備ともイハルの事也

神代 神渟名川耳天皇 綏靖天皇

風姿

岐山疑

不能致果

伊志幾略伊美志也今亦云伊志久毛是也左氏傳傳

欽傍山北イハル傍有イハル小祠曰岩井耳

磯城津イハル子者天皇

大日本彦耜友天皇 懿德天皇

報古事

御陰井上陸 安寧天皇

觀松彦香殖稻天皇 孝昭天皇

日本足彦國押人天皇 孝安天皇 天白志イハル百三十七歳イハル古事記

大日本根子彦太瓊天皇 孝靈天皇 百二十八歳イハル古事記

大日本根子彦國牽天皇 孝元天皇 百十七歳イハル古事記

百十七歳イハル古事記

〔^{スキヤ}〕
拔徳使

大嘗會の時御占ありたる田稻徳と取らば使と云ふ
神祇官の長上宮經とて西職の執行を事なり是に都を

一流重職と云ふ事一延喜式にあり

壬子忌宮精進近江國滋賀郡江南人世終日興炊物と食せと早と奉り宮精進と云火災せぬる祭なりと云世々
百俵の供り前々事行ひけるとい當世絶て奉り宮精進の名
と云知稀なりと云老の神り又曰此日炊物と食せし事あり
此日殊更火と燒るといし無用の火に其せ早と云とあり
然ると大物と断りたりぬと云由意なりと云ひらるる
此神事四宮の神官供事と云

御蔭祭之^{ミカゲノマツリ}城國高野宮ミナトノカミ四月二日行々御蔭の神社を下鴨の

攝社あり下鴨の神宮と云重斗比魯山の麓に祭禮の日下鴨の神宮

馬より供奉す葵祭あり必此御蔭の神事行ふ事と云

是下鴨の御生とい淡櫻祭葵祭再興の事も同此葵舊の復り

葵祭下神宮上神宮同四月二日行々下上の神宮同日なり

教使近衛次將は是と近衛使とい内藏寮の御幣御馬東宮

老馬といてまうり内藏寮史生馬寮伶人陪從冬向山城介

神事と誓言國に檢非違使非常と御山東の御事

館事とい下神宮とい上上の神宮と後また御事なり下上

相同前日御神院中社家と葵社と秋上地祭三百年来絶

ありして百十四代帝東山院元祿七年甲戌のち御再興あり

俗説塵塚草紙三卷 八塩政著

日本軍傳俗説のくさくさ世に傳ル兵法軍傳者吉備大臣大倉ヨリ
傳(来)テ今世ニ行ルハ諸葛亮ノ字孔明八陣ノ陣吳子カ九地陣
傳ニテ上首日本ニ軍傳ノ無コト、言トイハレハ國史ヲ見サレ疾
其説其證左ニ奉テ言フ云々
神武天皇西國ヨリ船軍ヲ催シ東ヲ伐給フ時女軍男軍天皇
炭火業ノ軍傳ヲ用玉テ凶徒悉ク平治玉テ山林ヲ披拂大宮ヲ經
營恭テ畝傍山東南檀原地幸而幸有司ニ命メ日本帝宅最
初是全和軍ノ神傳者ル由テ吾國ヲ神武一體ノ國ニコソ有ハ
聖余彦尊ノ御謚ヲ神武天皇ト稱ニ奉ニテモ考案スベシ
女軍ト云ハル軍ナリ後世此ヲ擲キト云ヘリ。○女坂ト云ハル郡
宮奥村西ニアリ十市郡界ナリ

田ノ軍八田ノ軍ナリ後世此ヲ追キト云ナリ。○田坂
宇多郡半坂村西ニアリ城上郡界ニアリ
墨坂ト云ハル田郡萩原村西ニアリ

大自生ト云ハル日向征ノ勳於此逆天道之紀云々

同書同卷云、天竺國牛養尊説云々云々天竺國と日本とノ國風の違ハ
何事也天竺國云々牛ノ養尊と云レテ大清淨の物とて尊敬を其證を
南海奇飯論曰乾ハ牛養ノ地也據テ清淨なり也而後其ナリ貴也
卧息ノむと云ハル云々三才圖會曰南尼瓦羅國天竺國牛養尊と云レテ
養尊或云是と姓又と樂と云レテ又宗宗に牛養尊檀と云レテ牛養と檀と
違テ佛法修持の座と云レテ又佛本行經云十四卷云一身王アリテ
説ク右偈あり其偈云世人皆取吾養尊用塗地為清淨云々

我果の俗説履新ト雖も冠ヲ用ヒテ假令養尊清淨也人の
席又云云也。高類人問曰いふ此を養尊也其物最上
醍醐味ト云ハルその物いふ此を養尊也其物最上
牛の乳と云ハル此を養尊也其物最上北天竺國吉祥山を

敬言躰

神幸の頃ゆゑはゆゑに云前駐りて云今諸社に神幸の時
又神儀と獻上とを聲を發してカフと云是てみまはれと追つと云
又アチメとも又或説カフと云は陽をよむるなりし
此説私意附會之訣して信むへし

齋夜

後夏冬日月之

散齋致齋

外清淨内清儉

名は要集云散齋とも神事の當日と定て作の前後の間精進
潔齋も是とあり後散齋とも外清淨の行儀是之致齋
神子の正當の日格式の文の如く六色の林法と守一心不乱
是と是と致齋と云

九ノ二

○ 菅山 大和

為宣賢

夫木 菅の居る谷の心と夕雲を眺むやふゆくふゆの山

○ 村田山

~~~~~

家集 みちのけ村田の山を眺むるまはの駒も近付ぬらじ

○ 菅生山

為頼

卯玉 朝和らうきおと見れいふあはさるまはあはのそと

○ 諸山

常陸

~~~~~

夫木 あの村はあまの山を眺むるあれもあれのころやまうら

○ 吹上ノ滝

細伊

~~~~~

春 吹凡の吹上ふさるる葉もあはれあはれはづのころも

○ 逆川

細伊

夫木 逆川の夜々の葉を光をささる川の流れとてを

○ 栗水

大和

山若くくさみの上の子鹿のゆえあまをりなるころ

○ 濱村

伊勢

る寄 村はあまの村にまふらふを眺むるひらくこけり

○ 田中ノ村

近江

夫木 皇のちとあまの秋のはじめは田中の村のわなを眺む

○ 高田村

~~~~~

夫木 高田の村を眺むるや高田の村を眺むる

○ 三輪山

大和

~~~~~

夫木 三輪の山を眺むる余もあはれ

六首番

○司馬野 大和

○うづひまの池 大和

○堀川 山城

○玉田生川 山城

○三ヶヶ島 伊勢

○轟雄原子 所 幣 嶋 川 名 あり

○笛川 伊勢



八坂瓊五百箇御統

千箇用類

潮満瓊  
潮満瓊

坂と尺と五百顆又八坂彌榮瓊赤玉  
五百箇多き  
其頭所  
天停名并赤名  
去来真名并

神鏡裡寶珠龍皇船車屋形日形月形  
松杉草水等御統あり  
寶鏡開  
重社鏡石目

八握劍  
九握劍  
十握劍

地鹿正劍

石在

蛇韓劍

天掃斬之劍

羽羽斬劍

大葉劍  
神戶劍

陸奥境と守護をも吾勝尊正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊

神皇正統記云正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊高皇產靈尊の女

栴幡千千姫命ありて鏡連日尊瓊瓊杵尊よりなり吾勝尊草

原の中作よりなり御子生れありて彼と下をべし

申多しひて天上に留りて後鏡連日尊と下し多しひて

外祖高皇產靈尊十種の瑞寶と授け給ふ尊早く

神去給ひて凡國の鏡とて給ひて後又瓊杵尊を授けし

天照大神三種神器と傳へ給ふ後又瓊杵尊を授けし

鏡連日尊是を得多しひて然して日嗣の神とて傳へ給ふ

按て鏡連日尊瓊瓊杵尊より先立て葦原の中國に下給ひて三種の

神寶と傳へ給ふ御重とて給ふ此鏡連日尊十種の神

寶を傳へ給ふ猶臣下の任をせしむるべし



○寶珠山立石寺、在鼻上中野、天台宗、寺鐘千四百七石、  
 開基慈覺大師、本堂華師、寺舎土坊、  
 堂塔多、寶物數多、堂後有清泉即大師  
 所修出、八町有奥院

○久保田馬口寺町

月居山東泉寺旭川端、不即明王、  
 常陸國月居山、瀧、  
 りり、  
 于末流、  
 水内多、  
 古川町、  
 小路

月居大勝正

于末流、  
 水内多、  
 古川町、  
 小路

芳陽軒

○河證上人、延寶三年七月四日、仁和寺一品入道性義親王、  
 會贈法印

佐井義重公の五男、幼名申若唐、又改名彦治、  
 北又七郎義康、為子、諱義直、後改義繼、  
 仁和寺内尊壽院中興開山、  
 寂行年四十五歳、  
 雄勝郡八口内山嶽下大杉太、  
 次一丈八尺九寸



甲一丈九尺五寸  
 雄勝郡八口内山嶽下大杉太、  
 次一丈八尺九寸  
 北古千三百、  
 平康那結殿村、向宗通覺寺任僧代之

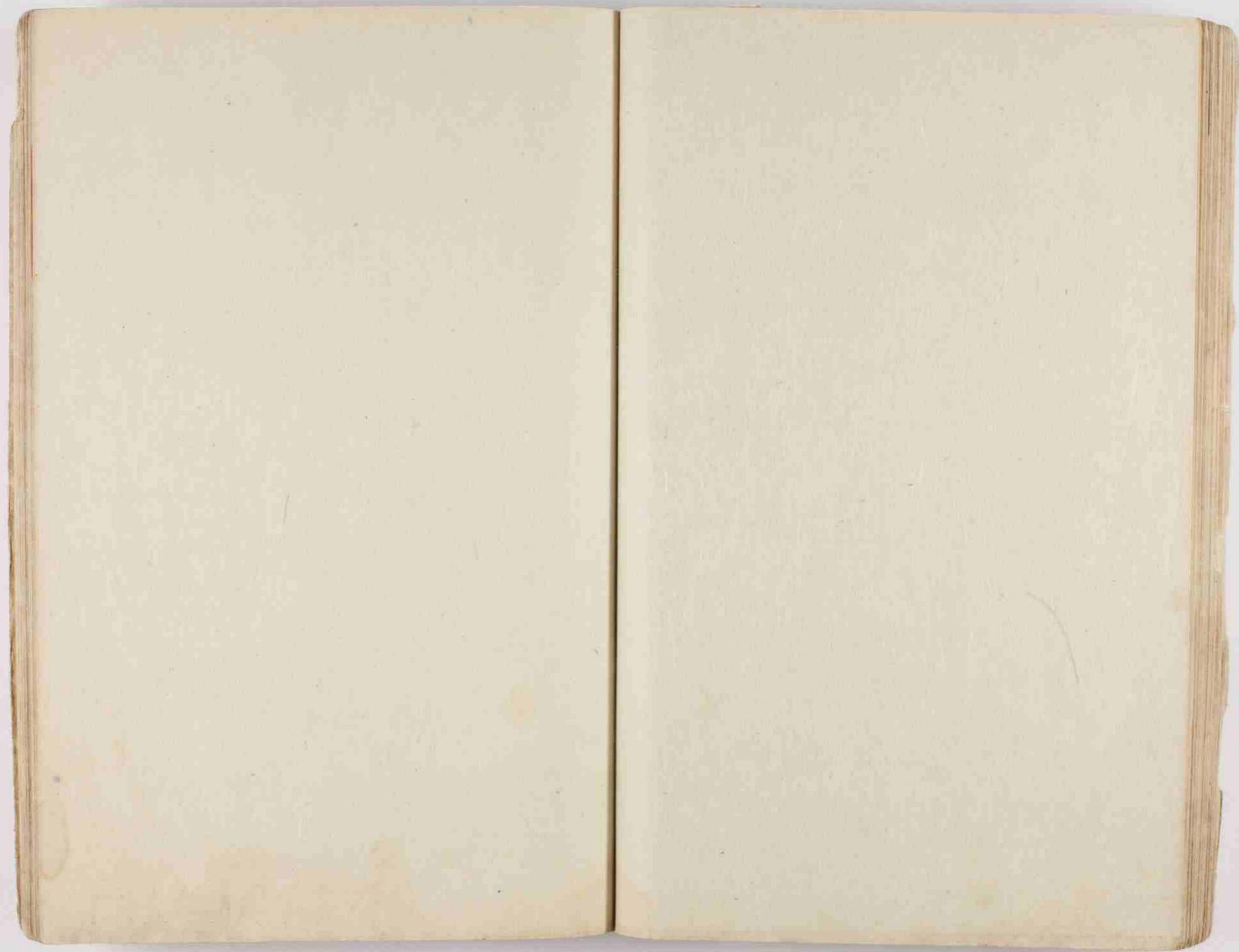




爲鎮兵三代實錄世四其雄勝城美十道之大衝也國之要害在  
 此地<sup>カ</sup>と及<sup>カ</sup>りて陸奥出羽越後<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>なり<sup>カ</sup>城柵<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>蝦夷<sup>カ</sup>の  
 北<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>叛<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>備<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>民<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>孝<sup>カ</sup>德<sup>カ</sup>紀<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>化<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>  
 造<sup>カ</sup>淳<sup>カ</sup>足<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>置<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>治<sup>カ</sup>般<sup>カ</sup>舟<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>備<sup>カ</sup>蝦<sup>カ</sup>夷<sup>カ</sup>遂<sup>カ</sup>遷<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>與<sup>カ</sup>信  
 濃<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>民<sup>カ</sup>治<sup>カ</sup>置<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>般<sup>カ</sup>舟<sup>カ</sup>淳<sup>カ</sup>足<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>銅<sup>カ</sup>七<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>勅<sup>カ</sup>割<sup>カ</sup>尾<sup>カ</sup>張  
 上<sup>カ</sup>野<sup>カ</sup>信<sup>カ</sup>濃<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>等<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>民<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>配<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>養<sup>カ</sup>貞<sup>カ</sup>元<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>信<sup>カ</sup>濃<sup>カ</sup>上  
 野<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>四<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>姓<sup>カ</sup>各<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>配<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>焉<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>遷<sup>カ</sup>東<sup>カ</sup>海  
 東<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>北<sup>カ</sup>陸<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>道<sup>カ</sup>民<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>配<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>室<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>發<sup>カ</sup>陸<sup>カ</sup>奥<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>浮  
 浪<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>造<sup>カ</sup>桃<sup>カ</sup>生<sup>カ</sup>城<sup>カ</sup>既<sup>カ</sup>而<sup>カ</sup>復<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>調<sup>カ</sup>庸<sup>カ</sup>便<sup>カ</sup>即<sup>カ</sup>占<sup>カ</sup>著<sup>カ</sup>又<sup>カ</sup>淳<sup>カ</sup>宥<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>徒<sup>カ</sup>貫<sup>カ</sup>爲<sup>カ</sup>  
 柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>九<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>遷<sup>カ</sup>城<sup>カ</sup>東<sup>カ</sup>八<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>并<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>能<sup>カ</sup>登<sup>カ</sup>越<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>等<sup>カ</sup>四<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>浮<sup>カ</sup>浪<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>二  
 人<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>爲<sup>カ</sup>雄<sup>カ</sup>勝<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>没<sup>カ</sup>官<sup>カ</sup>奴<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>世<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>婢<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>百<sup>カ</sup>七<sup>カ</sup>十<sup>カ</sup>七<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>配<sup>カ</sup>  
 雄<sup>カ</sup>勝<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>並<sup>カ</sup>從<sup>カ</sup>良<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>七<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>九<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>河<sup>カ</sup>内<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>辭<sup>カ</sup>來<sup>カ</sup>當<sup>カ</sup>公<sup>カ</sup>爾<sup>カ</sup>無<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>

殺<sup>カ</sup>母<sup>カ</sup>配<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>勝<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>及<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>進<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>造<sup>カ</sup>柵<sup>カ</sup>戸<sup>カ</sup>足<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>に  
 かく<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>不<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>遷<sup>カ</sup>して<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>

**同書 第二十詔注** 古事記小船戸神といひて書紀を岐沖とてて口決纂  
 疏をこれと道祖沖といはせしむる道祖の字淳とれるを以て尚  
 里と小船戸神とありし淳を古事記此神名の布那斗と道祖と  
 去りし和名抄る岐沖と別不奉と道祖神といふの事とるを岐沖  
 と同し



菜

菜餅

糎

白蜜

一

神

尾

源氏より

正身の音

と云ふ

其神之正身

と云ふ

正身固

と云ふ

明律

諸王

諸臣

上

林

虫

瓦

獸

神倭

伊波

礼

思

古

命

吉

此

天皇

後

の

漢

様

此

論

神武

天皇

中

原

入

生

年

稻

氷

命

此

伊

波

對

面

誓

田

田

田

田

田

田

田

田

軍

防

令

小

防

人

之

田

田

田

田

田

田

田

田

田

源

氏

之

田

田

田

田

田

朝

夕

子

田

田

田

田

田

朝

夕

子

田

田

田

田

田

皇つぎふり 説經を撰定供奉志ふらむとて法隆の中書帯せり  
 説經作らる者あつて佛法の事しむる事なほ元録の頃より  
 無常なる昔物語とみえりしとほけりし事なり 元録の頃より  
 ありし 安居院の澄憲三井の定圓がとて相とす

白見以正言物行流木田末偶

白田中の供奉とまきうのひけの<sup>正</sup>権官<sup>正</sup>板<sup>正</sup>

神<sup>正</sup> 神<sup>正</sup> 神<sup>正</sup> 神<sup>正</sup>

山を臺木よりなるも北山をさうして

老の故あるをこれくして又山をさうしてあのかう  
こみみるのちきいありとあしていていそやまの山をさう

○あうし一月十日のふたりのあひまきあひまきあひまき

世系おこぬあひまき大杉山のあひまき谷とる山の木工寺あり

布狩衣まきい襖をいふあひまきあひまきあひまきの草中

たうるあの本あひまきあひまきあひまきあひまきのあひまき

あひまきあひまきあひまきあひまきあひまきあひまき

○十二三りの角あひまきあひまきあひまきあひまき

あひまきあひまきあひまきあひまきあひまきあひまき













六物新志 吐蕃 蒲里 哥 條下云 和蘭局方 是乃藥局中  
 也 第三百七十七號載 亞石里 歌斯 針路 悉 斯 哥 修 斯  
 方 曰 亞 石 里 歌 斯 貳 拾 肆 錢 乾 善 貳 錢 右 二 味  
 各 為 細 末 以 細 末 以 唱 納 里 嶼 加洲 為 屬 於 亞 那 利  
 葡萄 酒 浸 之 以 酒 氣 通 徹 為 度 作 錠 熟 釜 上  
 焙 乾 或 天 日 曝 乾 之 亦 得



今昔物語 傳部 十

西塔の教國府とて字を説經者化りけり  
近江國近江郡矢野の郡司なりける  
田舎と坐する所も田舎なりける  
白狐ありける  
三物とて  
四物とて

On the first of the year  
The year of the  
The year of the

うゑのひに 文憑 馬鬣松 墓上にお枝松を五格極  
うゑのひに 新傳字鏡小編 論語を表てふ  
壘の表とて うゑのひに 新傳字鏡小編 論語を表てふ

○三河後風土記 長久平合戦之たり。池田家郎等  
 片桐與三郎 秋田加兵衛 林小平太 堀浦兵衛等  
 此小姓永井傳八直勝 後右太 并安藤彦兵衛尉直次  
 後帶等也 旗本より擧揚し 傳八戈とて 池田勝入を  
 つきまへし 首とて 安藤直次も 同く勝入  
 嫡子池田紀伊守之助と斬後一やく首とて

○秋田郡水口村依藤文左門男房夏十田口者  
 十六歳より 享和二年壬戌十月新坂在  
 小又村の鎌田三之次を親元を世本家子也  
 其子今文左門とて 文政七年の夏六月  
 其子今文左門とて 文政七年の夏六月

○果詩家人物志 石川 字大山 山人ト号 彦州人  
 神祖侍臣大坂ノ役ニ從テ功ヲ著ス 後辞シテ 叡山麓ニ築寺  
 村ニ隱レテ 詩仙者ト號ス 菅山 菅山 菅山  
 一首ノ國風ヲ咏ミテ 折言テ 市ノ入ラス 今現ニ 詩仙者ト号シ 澤 現且  
 遺物ヲ存ス 本名 菅山  
 集ト号ス

源氏一統志

馬場玄隆信志

十三卷

泰衡の郎等田河太郎行文秋田二郎致文等

合我の事又云下川田と田川と云り文致文云々

又再延延美治の秋田治高尚勝

羽州鎮自由利種麻呂

土御門院の警固七土佐國畑

石那坂の要害と破らん攻れ信夫庄元治石月と云

拒く常陸冠者為宗兄弟此要害を破らん

天正十七年己丑三月内大臣織田信雄益田山本郡

天頼川村に配流同十八年庚寅の

救更ありては

武野俗談云織田家本名津田氏

本姓素戔嗚尊神孫

代勢田大神宮神主あり大宮司從二位

小叙は源義朝の北

大宮司也大宮司別家津田左京大夫

源長太郎君本能寺

天皇の子孫也

討北次郎君伊勢國至北畠内大臣

信雄御由あり

少将あり配流一終

慶長五年御

馬場揚三郎あり

居館跡あり

信雄公是

伊勢守任人千種

神濱田嶺上木等

の軍兵も同城と打捨

如井美濃の城

旗下神戶藏人

津の城守り

敵大執事を

臆為心や

織田上野介信包

津城引



58/58

